

男も女も

対等に 生きるために

最近のニュースによく、初の女性誕生ということが報じられるようになってきました。また、夫が仕事をやめて妻の介護を……ということも報じられています。

今までは、女でなければできない「男でなければできない」と思われていたことも、性別にとらわれることなく、少しずつお互いの垣根を越えて、それぞれの個性や能力を発揮するようになってきています。

地球上には男性と女性だけです。お互いに性の違いを認め、尊重し合いながら、それぞれが自分らしく生きていける社会男女共同参画社会を目指し、平成八年四月に「白石市女性政策室」が設置されています。

今月は男女共同参画社会の考え方に触れながら、よりよい男女の在り方について考えてみたいと思います。

な ぜ今、男女共同参画社会？

あなたは、男に生まれたために、また女に生まれたために、今までの人生の中であきらめてしまったこと、やりたくてもできなかったことはありますか。

「男は安定した仕事につくのが一番」と言われて将来の夢をあきらめた、「女が大学に行くなんて、嫁のもらいてがなくなるぞ」と言われたから大学進学をあきらめた、「好きな仕事だからずっと続けたかったのに、結婚したら退職しなければならなかったから……」など。

平成十一年六月、男女共同参画社会基本法が成立、施行されたのをこ存じてしょうか。

この法律は、性別によって女性を差

別してはいけない、もちろん、男性を差別してもいけないということの基本にうたった法律です。

でも、「男女平等っていったって、男と女は基本的に違うじゃない」「国が法律を決めてまで進めるようなことなの？」そんな疑問を持つ方もいるでしょう。

確かに日本国憲法には、法の下の平等「や、基本的人権」として、今までも男女の平等はうたわれていました。

しかし、今までの日本は、どちらかというと男性中心の社会ではなかったでしょう。女性側の立場を忘れて社会生活を運用してきたことはなかったでしょうか。そして、長い間そのことに気付かなかつたり、真剣に考えようとしてこなかったのではないのでしょうか。

性 差を越えて

男性と女性は、筋肉や骨格などの生物学的な違いがあります。

しかし、現代は力に頼らなくても機械化が進んだことで、女性にもできる仕事がたくさん増えました。また、男女の考え方や感じ方の違いは、大事なことに対応する機会が与え続けられてきた男性と、与えられることが少なかった女性の環境の違いからくるものも大きいのです。「肉体的・生物学的な能力」と「個人の能力・可能性」を一緒のものと考えてしまつのは大変危険なことです。

今までの男女の在り方の不自然さに気づき、違いを認め合い、同じひと

の人間としてスタートラインに立ちとうとする努力、また、男女が性別にかかわらず、対等なパートナーとして、個性と能力を十分に発揮することができる社会をつくり上げていく努力が求められているのです。

キーワードは「ジェンダー」！

「ジェンダー」という言葉を

長い人生の中で、「男はたくましく……」「女はやさしく……」と育てられ、男と女はそういうものだと考えている方は、たくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。

「女のくせに」「男のくせに……」あなたもこのような言葉を使ったことはありませんか。

「男らしさ・女らしさ」というものは、



「参加」は単に仲間に加わること、「参画」は一歩進んで積極的に企画や決定にかかわり、主体的に行動し、意見を反映させていくことをいいます。

白石市では、市民参画型のワークショップの機会もたくさんあります。

男女ともに、単に仲間に加わるだけでなく、積極的に「参画」していくことが大切です。



赤ちゃんから始まる「ジェンダー」のすり込み

生物学的な性差とは違い、人間によって社会的・文化的に作られた価値観なのです。これを「ジェンダー」といいます。

もちろん、人は基本的に生き方や考え方が違います。すべての人に今までの考え方を改め、生き方を変えてもらうことはできませんし、また、それを強制しようとするものでもありません。ただ、「女だから」「男だから」として、その人の可能性を摘み取ってしまつては、ひとりの人間として尊重し、「やりたい」と思うことを応援してあげられる、また、「やりたい」ことを自由に選ぶことができる社会であつてほしいものです。

この「ジェンダー」という言葉は、男女共同参画社会を考えるときの重要なキーワードになります。

あ あなたの家庭でこんなことはありませんか？

例① 共働きの妻が残業で遅く帰り、朝方まだ眠っているのに、夫が朝食を作り、先に食べて出かけました。

「ひどい妻だ！一人で朝食を食べる夫がかわいそう」と感じますか？
では、この夫と妻を入れ替えても同じように「ひどい夫だ！」と思うでしょうか？

例② 私は家族を残して単身赴任をしています。

単身赴任というと、「中年になってひとり暮らしをしている気の毒な男性」を思い浮かべませんか？逆に女性が単身赴任をしたらどう感じますか？

例③ 今日は子どもの遠足。でも、お弁当をつくる時間がないので、やむを得ず買って来たおにぎりとおかずを持たせました。

「ご飯をつくるのは母親の役目」「母親は何をしているのだ」などと母親を非難してしまいがちですが、一緒に暮らす父親は責められなくてもいいのでしょうか？

いかがでしょうか？
このように、「あたりまえ」と思っていたことでも、ちょっと見方を変えると、ずいぶん偏った発想だということがわかりただけではないでしょう。



男女共同参画社会づくりに関する写真コンクール

<特選> 「わたしはわたし、ぼくはぼく！でもいっしょ！」 佐久間京子さん(自営業・不澄ケ池) 子どもたちの表情や目の輝きから、誰もが同じひとりの人間として、性別にとらわれることなく、個性を大切にしながら伸び伸びと生きていくことの大切さを感じとることができる。また、明るい未来をも予感させる素晴らしい作品ということから「特選」に選ばれました。